

## あとがき

本文に書いたことであるが、今回の旅ではガイドブック持参を止めた。それまでは大抵「地球の歩き方」シリーズを利用していたが、この本のあまり知性的とは思えない執筆者が、説教がましいことを書くのが不愉快だったし、その他記述も誤りが散見され、まじめに作っているのか次第に疑わしく感じていた。

シチリアを旅するのに、それほど訪れるべき場所も多くはなさそうだし、それならばガイドブックなどなしに、少しずつ現地で情報を収集しながら前進しようと、参考書としてはイタリア料理の本と、「地中海のダイヤモンド シチリア島紀行」(これもくだらない本だった)だけを用意した。ガイドブックの「余計なお世話情報」に煩わされなかったのは、清々した気分であったが、流石に情報不足も実感された。そんな旅の初期に「芸術と歴史の島 シチリア」を入手できたのは幸運であった。

イタリア料理のマナーに関しては、電子辞書に記載があることに気付き(P.102)、以後その情報を無視できずに若干ながら苦しめられた。ところがこの紀行文執筆のために、インターネットで情報を収集中に偶然「フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』」から以下のような記述を発見した。

イタリアでは食事の際に第一皿としてスープなどの汁物の代わりに供する。日本では「パスタは一皿目の料理であり、パスタだけを注文できない」などと言われることもあるが、これは現在では必ずしも正しくなく、正式な食事の際や高級レストランでの食事以外では、普通のパスタだけで主食として供される。

(傍点筆者)

うすうす感じていた通りだ。怪しげな情報に振り回され、時には無理して第二皿を食べた思い出は、腹立たしくもあるものの、何回かパスタだけを食したこともあり、これがマナー違反ではなかったことを喜ぶ。さらに教訓としては「旅人が訪れた土地のマナーを完璧に守るのは不可能」と、最初に覚悟すべきだ。

紀行文を書き始めて、第一作ができたのが97年の2月。それから約10年書き続けて、本作が17冊目となった。出来栄の方ははかばかしい進歩がないものの、執筆が旅そのものを変化させたように思われる。実例を挙げるならば、P. 170でオルレアンズ駅構内まで行って、トラーパーニ行き列車が間違いなく停車することを確認する、いささか偏執的行動も、結局は推測で物事を書くのはできるだけ減らそうという執筆方針に基づく。ポッタクリ公衆電話に引っ掛かったのも、「取材」気分があった故だ。

このような変化が良いものか否かの判断は難しいかも知れない。しかし当人は —— 以前より旅を楽しむことができるようになった —— と思い、満更ではない気分でのだった。